

平成二十七年十月三十日

閑靜にして何らの變哲無き住宅地、その街路を確たる當て無きまま緩やかに歩く。と、我が名を呼ぶ人あるに氣づく。その人、徐々に聲を大にし、我が肩を大ひに揺さぶる。何やら物憂く、まなこゆるりと開けば誰やらの顔、目に觸るるほど近くにあり。

「夢、見たりや。いかなる夢なるか。良き夢か、悪きか」と立續けに問ふなり。夢か。

中身は何か、思ひ出さむと努む。理屈も筋も無き夢にして、格別のことなし。相應しき言葉探すほどには脳内廻らず。「普通」と應ぜむを決め、言はむとすれどその初めの音なる、「ふ」來たらず。ううう・ふ・ふ・ふ・ううう・」と聲を絞り出せば、數人の笑ひ聲す。

我が應ずるを息詰めて待ち、その應じやう正常の範囲内なるを得て安堵せる氣分、彼らが笑ひ聲に混じると思ひたるは後のことなり。我、かく、手術の麻酔より覺めたり。

我が横たはる寢臺を白衣の人數人が押す。目を薄く開きて天井の動くを見、手術室を出て我が病室に向ふを知る。廊下を通り、室の前に到著の場面を記憶するも、ベッドをいかなる向きにして室内に入れたるか覺えず。麻酔界への出入りを繰返し居たるらし。

いかほどか經て我に返れば、六、七人の人、寢臺の兩側に立ち、上から我が顔に目を注ぐ。いづれも白きマスクす。テレビドラマにて、寢る患者の視點にカメラを置いて天井を下より映し、畫面の周圍には眼前にある醫者等の大なる顔數個を配することしばしばあり。これ當にその圖なり。皆、眞劍な眼差しで我を見る。なほ朦朧とすれども、かく多き人、異常なきや見出さむと我を見入るを頼もしく嬉しく思ひ、安心の氣持ちす。

我、幼き日よりこれまで大病のことなければ、己れ一人がために複數の醫者集ひくれたること記憶せず。今にして思へば、怪我の故に登校せずともお咎め無かりし友、盲腸手術後入院先にて先生の個人授業受けたる友、彼らを見てさもあたりたしと微かに願ふ自分なりけり。また、患ひて親類縁者友人の心配を集むる人を羨ましと思ふ心持、倒錯心理に疑ひなければども、永く意識の下にありたるを事實と言はざるべからず。

今回、醫師看護師多數看取り下され、それを樂しむと言ふは言葉が過ぎ、また知人その他諸處の煩慮を申譯無くも有難しと思ひたれども、この倒錯せる羨望感らしきものの對象に自らなり果てけり。心中、ひとまづの決著を得、一步大人になりたる心地す。

これ健康回復の他なる手術の一成果に數ふべし。

（平成二十八年二月十八日受附）